

〔文献紹介〕 松本歯学 23 : 194~210, 1997

key words : 野口英世 — 伝記 — 第4報

松本歯科大学所蔵の野口英世の伝記 (第4報)

矢ヶ崎 康

松本歯科大学創立者

枝 重 夫

松本歯科大学 口腔病理学講座 (主任 枝 重夫 教授)

A Collection of the Biographies of Dr. Hideyo Noguchi
in Matsumoto Dental University (4th report)

YASUSHI YAGASAKI

The Founder of Matsumoto Dental University School of Dentistry

SHIGEO EDA

Department of Oral Pathology, Matsumoto Dental University School of Dentistry
(Chief : Prof. S. Eda)

Summary

In the previous papers (the 1st, 2nd and 3rd reports) 234 books and journals concerning the biography of Dr. Hideyo Noguchi were described (Matsumoto Shigaku, Vol. 13, pp. 1~34, 1987; Vol. 15, pp. 217~231, 1989; Vol. 20, pp. 80~99, 1994). In addition to these, 38 books including both very old and new-published ones were introduced in this paper. Among them 5 books described below were thought to be important.

- 1) Shinoto, Y. and Kosaka, M.: Great Biologists and Biology. pp. 258~260.
Kogakkai, Tokyo, 1930
- 2) Doi, B.: The Praise of Hodeyo Noguchi. pp. 1~71.
Private Publication, Inawashiro, 1932
- 3) Komatsu, M.: Great Men and Strange Men. pp. 107~112.
Gakuji-Shoin, Tokyo, 1934
- 4) Kobayashi, S.: Memories of Hideyo Noguchi. 1st ed. pp. 1~192.
Iwanami-Shoten, Tokyo, 1940
- 5) Okumura, T.: Hidéyo Noguchi. pp. 1~263.
Kodansha, Tokyo, 1956

はじめに

野口英世に関連する伝記類については、第1報(1987)¹⁾で119種142冊、第2報(1989)²⁾で29種34冊、第3報(1994)³⁾で51種58冊を紹介した。今回は、その後に入手できた古書と新しく発行になった伝記類36種38冊と野口の著書などを記録する。

記載の方法は、第2報や第3報と同じく、すべてを発行年順とし、文献番号と図番号は第3報の継続とする。

野口英世関連の伝記

200)篠遠喜人, 向坂道治: 野口英世. 大生物学者と生物学. 258~260頁. 興学会出版部, 東京. 1930 (図161). 世界の大生物学者(動植物学者ばかりでなく医学者を含む)の人物と業績を紹介しているが, その中に野口英世が入っている. 第3報³⁾において, “(150) 帆刈芳之助: 趣味の偉人伝 (1931年) は(野口が)世界の偉人伝の中に組み込まれたものとしては最初であると考えられる.”と記したが, 本書はそれより1年あまり早い. なお扉には著者2人の署名がある. 本書の概要は別誌に発表した(枝, 1996)⁴⁾.

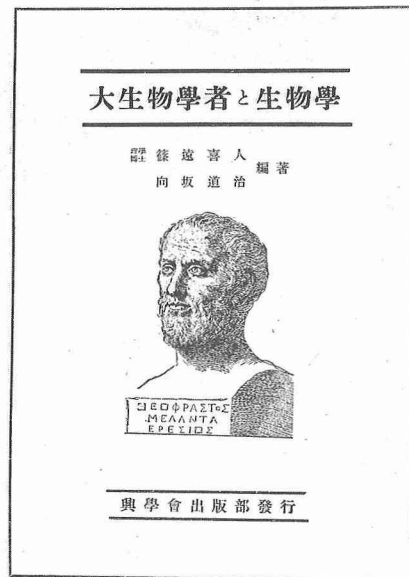


図161: 篠遠喜人, 向坂道治: 大生物学者と生物学. 興学会出版部, 1930 (ケース)
(この像はアリストテレスの弟子で植物学者のテオフラストス, 372—288 B. C. である.)

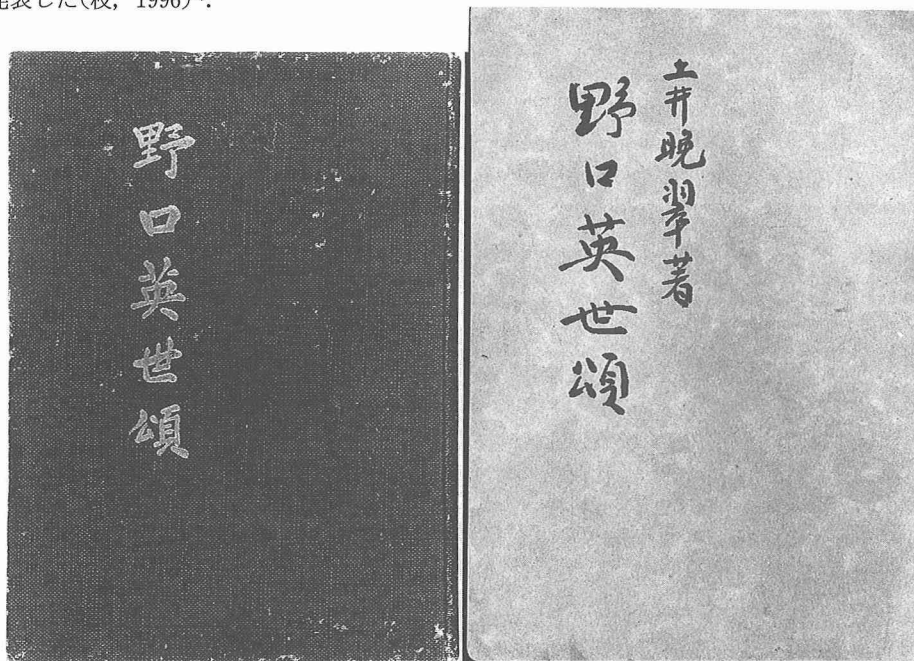


図162: 土井晩翠: 野口英世頌
左: 小林 栄 (編・発行, 非売品) 1932
右: 野口英世博士記念会, 1934 (第1報で紹介済)

201)土井晩翠：野口英世頌。猪苗代。小林栄の編集兼発行になる個人出版である。79+2頁。1932(図162)第1報¹⁾の11)で紹介した「土井晩翠著、野口英世博士記念会編：野口英世頌、1939」の元版である。扉の裏に“昭和7年8月博文館出版土井晩翠先生の詩集「アジアに叫ぶ」より著者と書店との承諾を得て抄出し非売品として刊行す”とある。口絵は野口の顔写真1枚だけである。天金のクロース本である。

202)大木喜代之進(堀七蔵校閲)：世界的の偉人野口英世博士の教育思想、162頁。教育実務社、東京。1933(図163)。本書については第2報²⁾の121)ですでに紹介してある。ところが本体は全く同じなのにケースに2種あることが分った。図163の左上下が新発見のケースで、同右上下が紹介済のケースである。これら両者を比較すると、表(上の左右)では、ほぼ同じであるが中央の字は右の方が少し大きくやや横長の書体である。しかし裏は全く異なり、左は明治図書株式会社蔵版、右は教育実務社となっており、中央のマークも違う。明治図書株式会社は発売所、教育実務社は発行所である。従って書誌学的には右側が正しい。なぜケースを2種作ったか興味がある。このケースについても別誌に発表した(枝、1996)⁴⁾。

203)小松 緑：高峰譲吉と野口英世—アメリカ美人を妻にして—。偉人奇人。107~112頁。学而書院、東京。1934(図164)。著者の小松緑は、野口英世が初めて渡米する際に偶然、同じ船に乗り合わせた公使館書記官である。従って本書には船内で野口がシェークスピアの「マーチャント・オブ・ヴェニース(ベニスの商人)」を読んでいたことが記されている。稀覯本

204)浜野 修：野口英世言行録。98頁。三省堂、東京。1939(図165)85×149mmのポケット判である。言行録とは伝記のことで、後記の案内によるとこの“小型修養叢書”には「乃木将軍」、「東郷元帥」、「吉田松陰」、「西郷南洲」がある。

205)小林 栄(述)：野口英世の思出。192頁。岩波書店、東京。1941(図166)。第3報³⁾の154)で、第2版と第3版を紹介したが、今回やっとその初版を入手できた。これらを比較してみると、本文は全く同じであるが、104頁と105頁の間にある手紙の写真版が、初版では小さくてほとんど読めないのに、第2版と第3版では大きくなり(配

列も違う)読み易くなっている。また製本所が田中製本、桂川製本、田中製本と変化し、第3版の奥付には統制を示す“出文協承認 ア360014号”が追加されている。

206)湯浅謹而：野口英世。263頁。潮文閣、東京。1942(図167左)。第1報¹⁾の38)で紹介したのは、敗戦の年の1945年10月10日に弘学社から発行されたものである(図167右)。その時、“エクシュタイン野口伝は立派な著作であるが、日本人科学者の観点から書き換へられなければ、我等は満足できないと記されているところを見ると戦争中から準備されていたに違いない。”と記したが、実は太平洋戦争が始まって1年後の1942年12月15日に潮文閣から発行した本(図167左)の紙型(あるいは版組そのものか?)から、発行所を変えて発刊したものであった。それにしても潮文閣本は紙質が粗悪なのに敗戦直後の弘学社本の方が比較的良質なのは不思議である。

207)水藤春夫：おおよけどをしたて—野口英世一。児童文学者協会(編)：偉人の少年時代 一年生。72~77頁。158~159頁。実業之日本社、東京。1953。書名の「一年生」というのは「学年別偉人の少年時代」の小学校一年生用ということで、本文はすべて“ひらがな”である。

208)奥村鶴吉：野口英世。263頁。大日本雄弁会講談社、東京。1956(図168)。世界伝記全集全50巻のうちの40である。奥村は元東京歯科大学長で、野口英世の伝記としてEckstein本と双壁をなす岩波書店発行の奥村本の著者である。従って彼の子供向けの本書を、筆者の1人枝はこの25年ほどずい分探したものである。しかしこの全集の他の伝記は稀に眼にすることはあるものの、野口英世には縁がなかった。全50巻揃でもあれば無理してでも入手しようかと考えてみたがもちろんこれも無かった。ところが幸運にも今年(1997年)6月14日に東京都千代田区神田の古書店で20巻くらいの中から発見し、無理に割愛してもらうことができたのである。本書の冒頭に“この伝記を読むみなさんへ”があり、これを1956年10月に書いているが、奥村はこの2年4か月後の1959年2月4日に病没しており、本書を執筆した時もすでに病魔に患されていたはずである。また最初に“思い出”という章があって、“野口さんとわたし”、“記念の時計”、“二つのながれ”の3つの項で、奥村と野

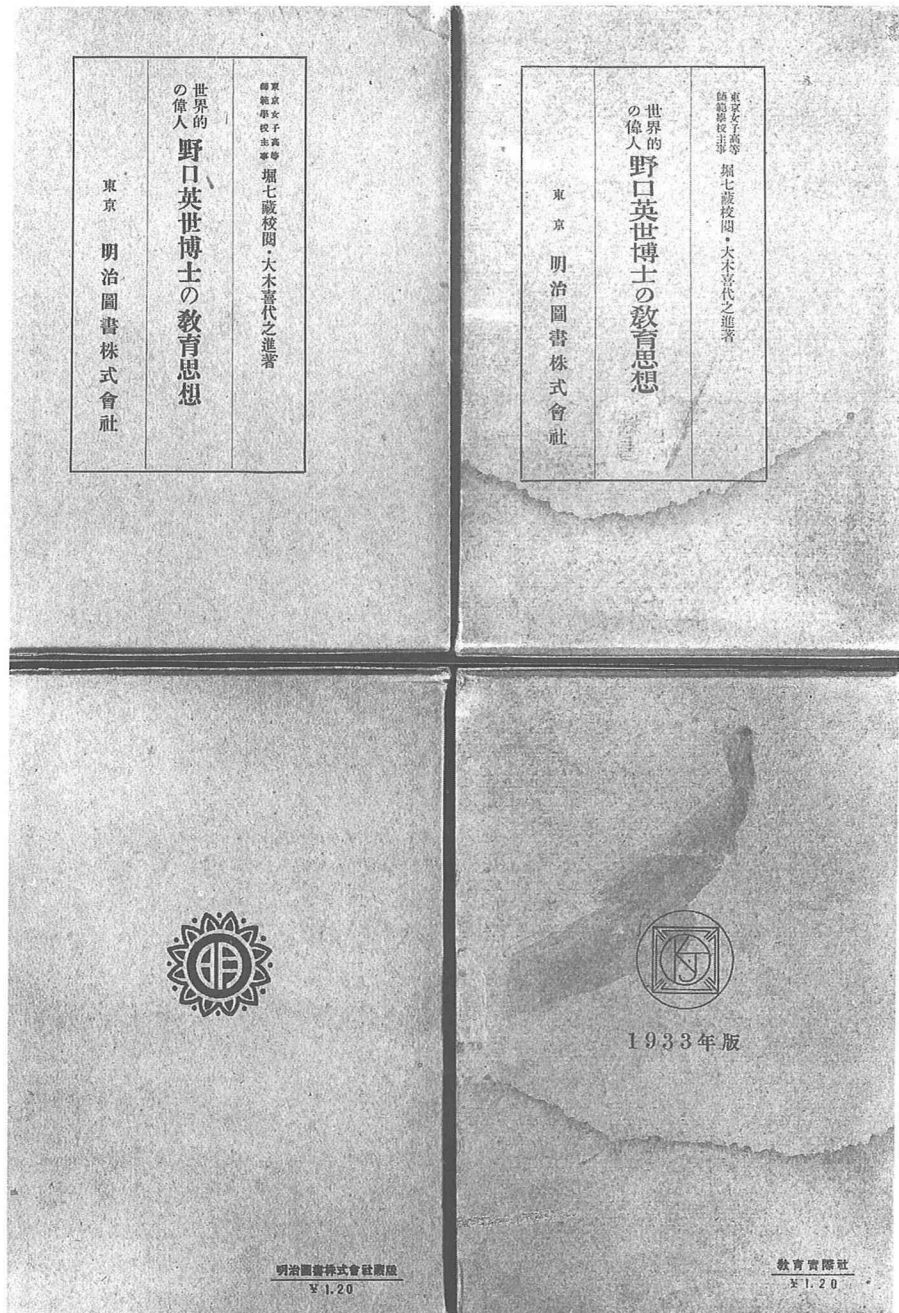


図163：大木喜代之進：野口英世博士の教育思想，實際社，1933（ケース）
 左上：新発見のケースの表 右上：第2報で紹介済のケース
 左下：その裏，明治圖書株式会社蔵版 右下：その裏，教育實際社

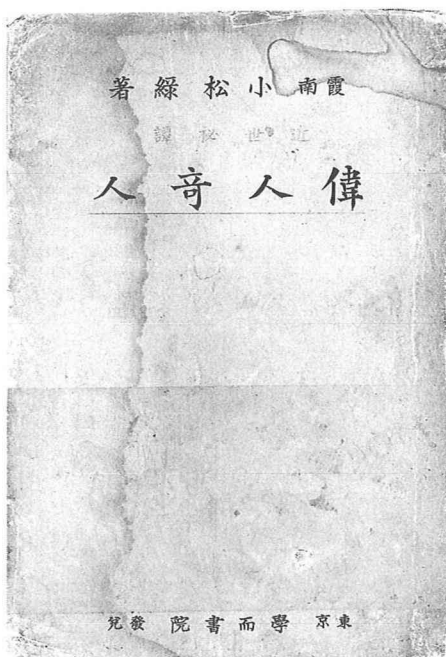


図164：小松 緑：偉人奇人。学而書院，1934

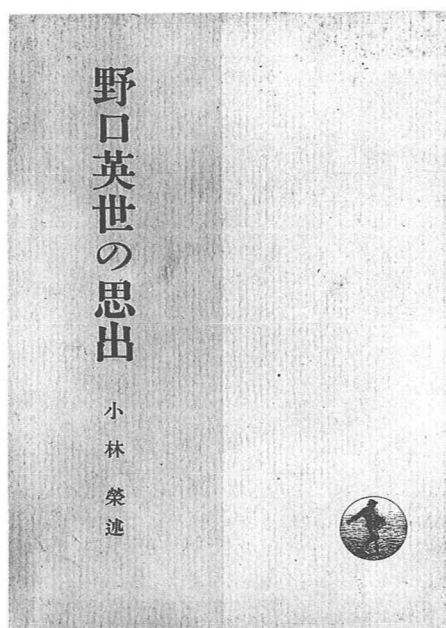


図166：小林 栄（述）：野口英世の思出。岩波書店，1941

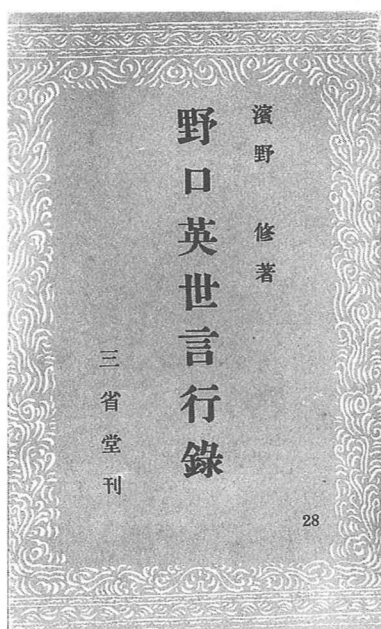


図165 浜野 修：野口英世言行録。三省堂，1939

口の人間関係が詳細に記されているのはオリジナルでもあり貴重である。

209)波多野完治，小川未明(監修)，てんぼうの少年．発明発見物語集 世界の偉人 3年生，48～55頁，159～160頁．小学館，東京，1960（図169）。「本書は昭和35年1月に発行された小学三年生の増刊号を読者のご要望にこたえ特に単行本といたしました。」と奥付の横に記されている。「小学三年生」には同年8月にも夏休み増刊(号)を出しており，これにも野口英世が選ばれている〔第3報²⁾の160〕で紹介済]ので，同じ年に3回も野口が紹介されたことになる。なお執筆者は11名で，誰が野口を担当したかは明記されていない。

210)土家由岐雄：野口英世．154頁．集英社，東京．1960（図170）．戦後15年経っているのに紙質はよくなっておらず，今回入手した本は本文のまわりがヤケて変色している．155頁から209頁にかけて野口とは無関係の漫画や劇画や小説などが付いているのは面白い．付録の意味か。

211)松原宏遠：神話化された野口英世．科学・明治百年史—エピソードでつづる三代の科学史—．129～131頁．講談社，東京．1966．ブルーバックス B-83である．本書が出版された時代は，いわ

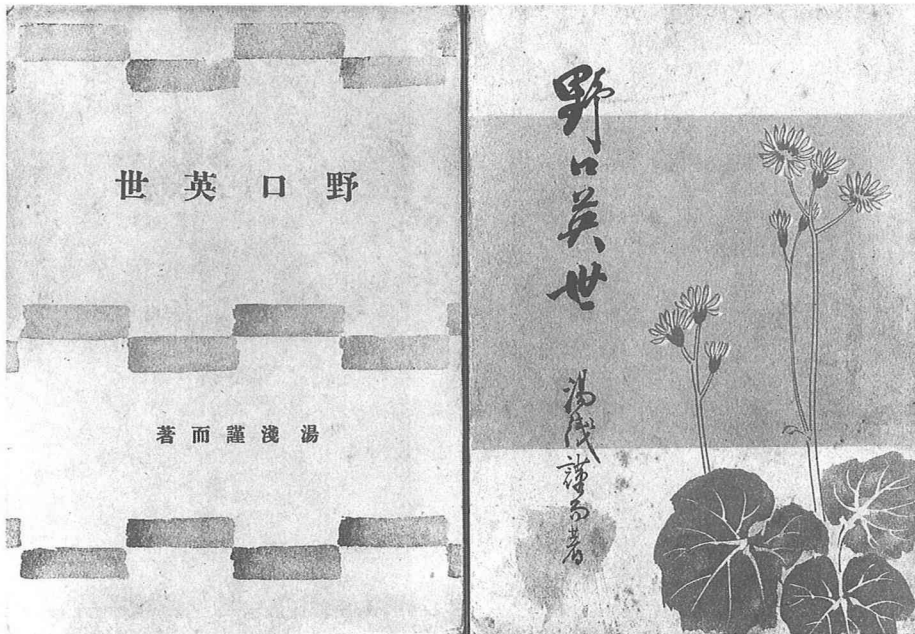


図167：湯浅謹而：野口英世.

左：潮文閣，1942

右：弘学社，1945（第1報で紹介済）

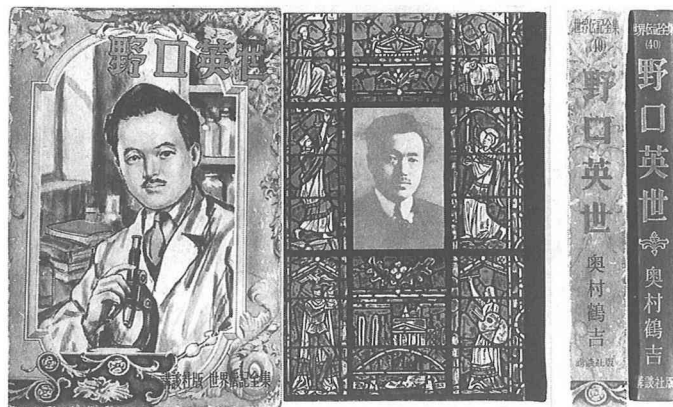


図168：奥村鶴吉：野口英世。講談社，1956

左：ケースの表 中：本体の表紙

右：ケースと本体の背（著者名は背だけ）

ゆる「偶像破壊」的思想が盛んだったせいも、野口を「期待される人間像」とやらには遠すぎるように思われます。死者に鞭うつつもりはありませんが、偽造された神話は、所詮歴史とは両立しないものです。」と結んでいるが、この著者は子供向けの野口英世伝しか読んでいなかったのだろう。

212) 中村圭吾：野口英世。教科書物語—国家と

教科書と民衆—。234～244頁。ノーベル書房，東京，1970（図171）。これは前年に出版された筑波常治：野口英世（1969年）[第1報¹¹⁾の43]で紹介済]の内容を紹介したようなものである（236頁にそのことが記されている。ただし3か所ともすべて築波常治と誤記されている。）。)

213) 森下 薫：箕面「琴の家」の野口博士—南

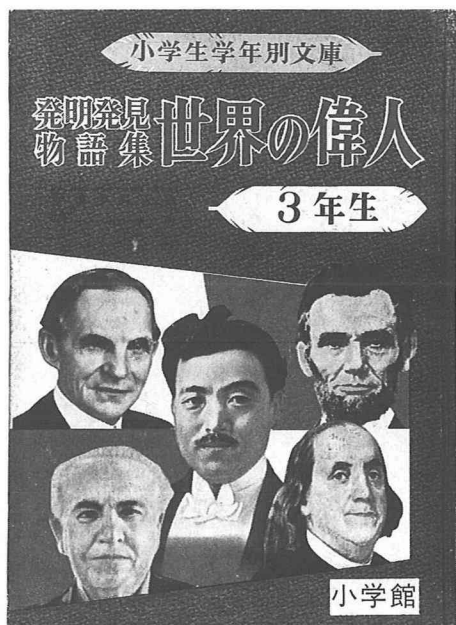


図169：波多野完治，小川未明（監修）：世界の偉人。小学館，1960

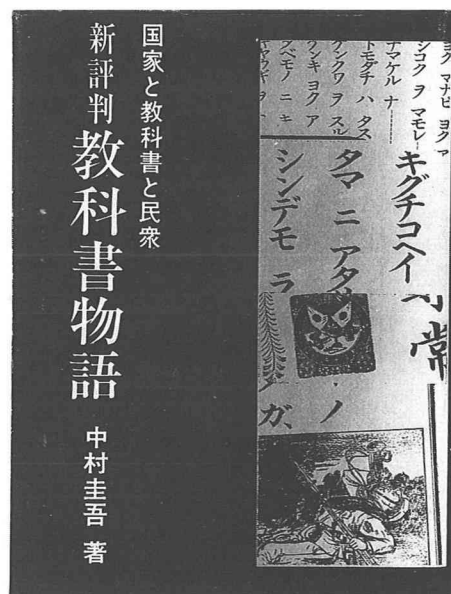


図171：中村圭吾：教科書物語。ノーベル書房，1970（カバー）

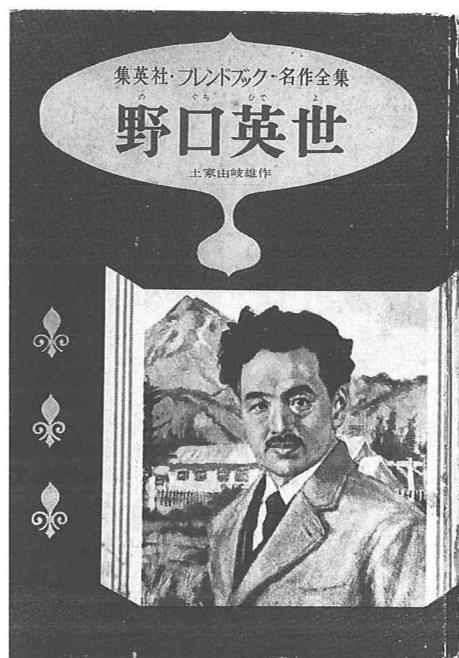


図170：土家由岐雄：野口英世。集英社，1960

川光枝さんは語る一、アクラの野口博士—その死をめぐって—、ある医学史の周辺 風土病を追う人と事跡の発掘。161～191頁。日本新薬、京都。1972（図172）。前者「琴の家」には野口が15年ぶりに帰国した際に、母シカを伴って関西見物に出かけた時の様子が記されている。なお南川光枝は琴の家の主人の妹である。後者「アクラ」で重要なのは、野口が死亡したのはアクラ市内の、従来からいわれているコレブー病院ではなく、リッジ病院（Ridge Hospital）であることが判ったことである。

214)若林一郎：貧乏におっかけられていた野口英世。新・英雄事典—英雄・偉人100人の意外なエピソード—。149～150頁。朝日ソノラマ、東京。1974。野口が英世と改名した原因となった「坪内逍遙：当世書生気質」に出てくる学生の名前が“野々口清作”と間違っている。すなわち“野々口精作”が正しい。

215)奈良島知堂：母とともに 野口英世努力の生涯。221頁。栄和出版部、東京。1977（図173）野口の誕生100年を記念して少年少女向けにかかれたものである。92頁の“血脇先生は、小林先生とならんで、清作の面倒をみた大恩人で”までは

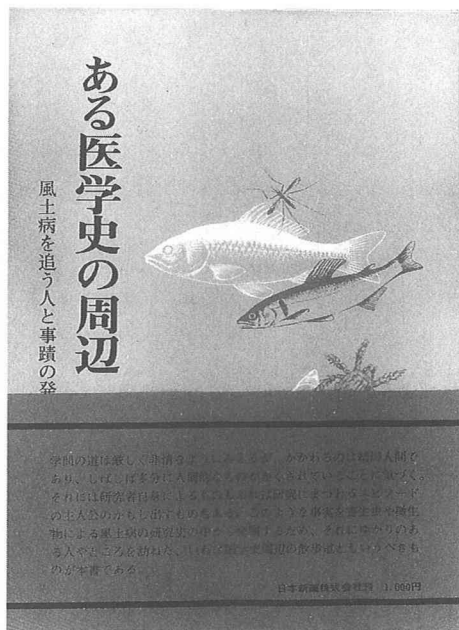


図172：森下 薫：ある医学史の周辺。日本新薬，1972
(カバーと帯)

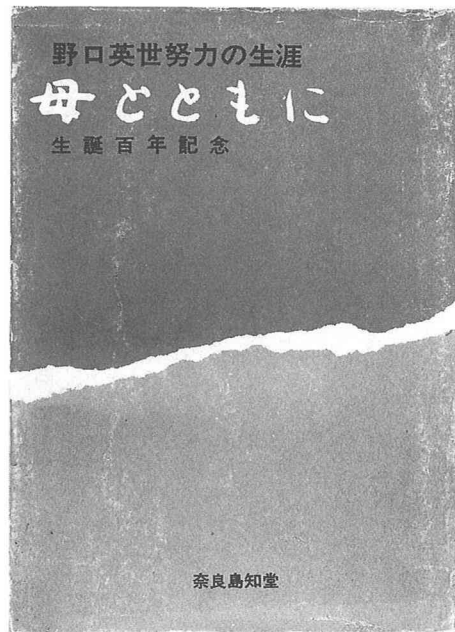


図173：奈良島知堂：母とともに 野口英世努力の生涯。栄和出版部，1977 (カバー)

正しいが、“後に東京歯科大学の名誉総長になったかたです。”は誤りで名誉学長である。

216) 森下 薫：野口英世の登場。予防医学を基礎づけた人々—自体実験の勇者たち—。132～133頁。大阪予防医学協会，大阪，1978 (図174)。ここでは、アンデスの奇病「オロヤ熱」と「ペルー疣」が同一疾患の異なった病態であることの証明に野口が多くの貢献をしたことが記されている。つまり毒力の強い株が「オロヤ熱」を起こし、弱い株が「ペルー疣」を起こすというものである。この業績についてはあまり知られていない。なお本書の「黄熱との戦い」の項 (161～189頁) には、たった1行、野口がその感染によって犠牲になったことだけが記されている。

217) 飯塚よし照：黄熱病と戦って死んだ野口英世。日本の偉人 まんが伝記事典。250～251頁。学習研究社，東京，1979 (図175)。表紙絵に選ばれている (矢印)。

218) 長木大三：野口英世。北里柴三郎，124～126頁。慶応通信，東京，1986 (図176)。第3報³⁾の175 (1989) と同じ著者がその3年前に出したものである。本書には北里が述べた野口の死去に対する哀悼の辞が記録されている。

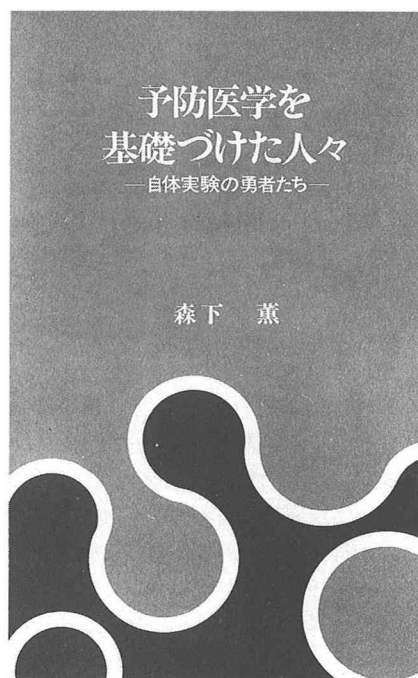


図174：森下 薫：予防医学を基礎づけた人々。大阪市予防医学協会，1978



図175：飯塚よし照：日本の偉人 まんが伝記事典。学習研究社，1979（カバー）

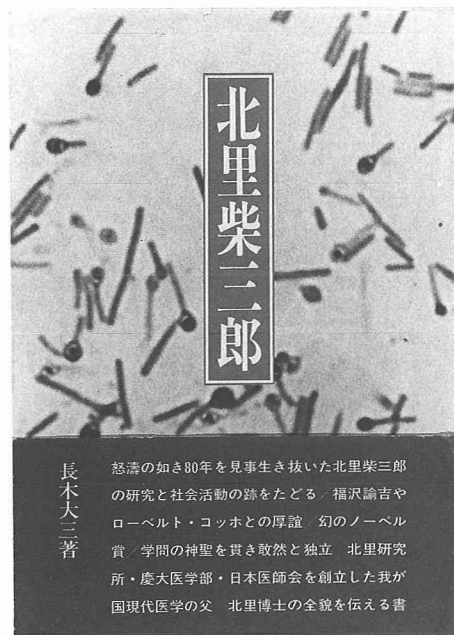


図176：長木大三：北里柴三郎。慶応通信，1986（カバーと帯）

219) 神戸淳吉(文)，田中秀幸(絵)：のぐち ひでよ。30頁。チャイルド本社，東京。1987(図177右)。伝記ものがたり6。表紙と奥付は「のぐち ひでよ」だけなのに裏表紙には「黄熱病と闘った細菌学者」という副題が付いている。小学校低学年用で，本文は全てひらがなである。1984年に出た初版〔第1報¹⁾の100〕で紹介済〕では表題が漢字の「野口英世」であった(図177左)。表紙デザインも絵は同じであるが枠が角から丸になった。

220) 竹崎有斐(文)，高橋信也(絵)：日本が生んだ せかいてきな い学しゃ 野口英世。こども版 偉人物語下巻。80～87頁。学習研究社，東京。1985(図178)。表紙絵になっている(矢印)。

221) 湯川豊彦，荒木 元，伊丹洋子，大屋研一，河野俊恵，古屋直子，山本文子：世界的細菌学者となった，貧しい農民の子 野口英世。日本・世界 偉人物語100話。131～134頁。主婦と生活社，東京。1988(図179)。表紙絵の舟に乗った人々の中央に野口がいる(矢印)。

222) 吉村裕之：ストール博士と野口英世博士。病原体を追った人びとーその栄光と残照ー。183～185頁。北国出版社，金沢。1988(図180)。ストール博士はニューヨークにあるロックフェ

ラー研究所の世界的な寄生虫学者で，野口とは交友が深かった人である。この中に野口と交友があったもう一人の学者ブイトン・ラウス博士の名前が出てくる。ラウス肉腫で有名な病理学者である。これは新しい情報といえる。

223) 森いたる(ぶん)，近藤高光(え)：病気から人びとを守った医者 野口英世ものがたり。75+5頁。金の星社，東京。1991。せかいの伝記ぶんど 3で「小学校1・2・3年生むき」とある。

224) 高橋美幸，関山英夫(監修)：野口英世。126頁。吟遊社，東京。1992(図181)。少年・少女伝記ノンフィクション ジュニア版①である。帯に記されているように，松竹映画「遠き落日」〔第3報³⁾の195〕で紹介済〕に合わせて出版された。

225) 川崎敏朗：野口英世。心が語る日本の歴史。475～490頁。神奈川新聞社，横浜。1994(図182)。登場する38人中の36人が明治時代までの人物で，大正時代からは野口英世，昭和時代からは吉田茂のそれぞれ1人が選ばれている。すべて1人称で書かれているのは伝記としては異例といえる。

226) 中山 茂：野口英世。299+2頁。岩波書店，東京。1995(図183右)。本書は最初，朝日新聞社

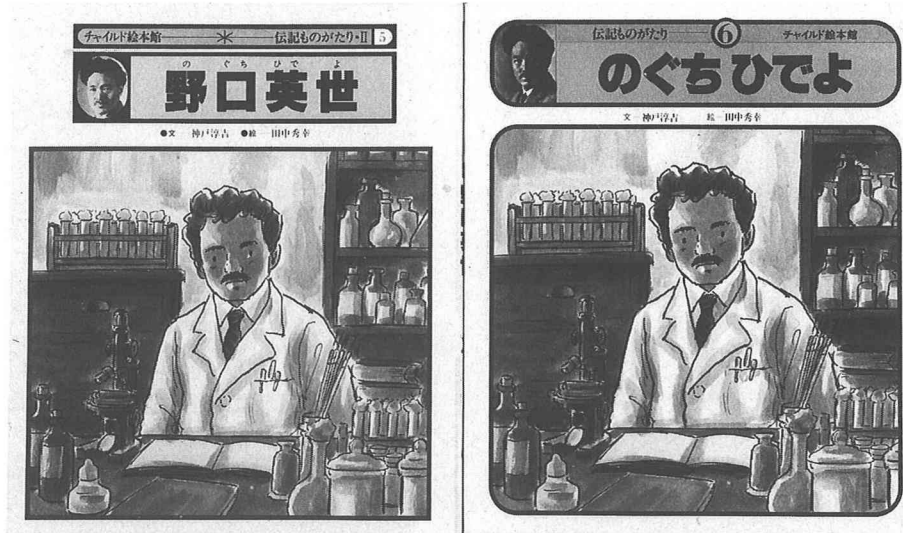


図177：神戸淳吉（文），田中秀幸（絵）：野口英世，のぐち ひでよ。チャイルド本社。
左：初版，1984 右：第2版，1987



図178：大石 真他 5名：偉人物語下巻，学習研究社，1985（帯）

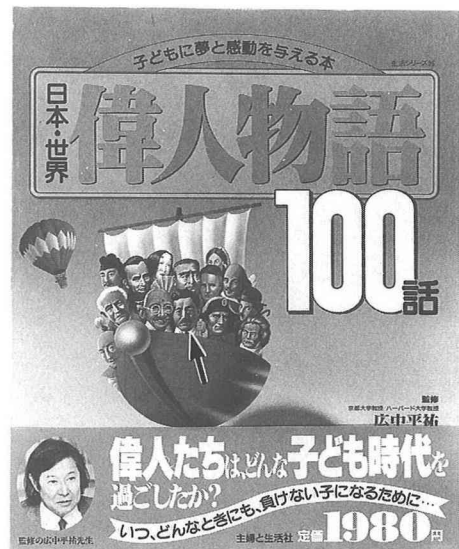


図179：湯川豊彦他 6名：日本・世界 偉人物語，主婦と生活社，1988（帯）

から、「朝日評伝選21」として1978年に出版され[第1報⁹⁾の53]，図183左]，その後，同社から「朝日選書389」として1989年に再出版された[第3報⁹⁾の178]，図183中]．ところが今度は，発行所が異なる岩波書店から「同時代ライブラリー-239」として三たび発行された．最近では珍しいことである．

本書には前2書にはない年譜（2頁）が付いた．

227) 水川秀海：野口英世．水川賛三郎小伝，付近代日本歯科医学の軌跡．75～81頁．自費出版，浜松，1996（図184）．著者は筆者の1人（枝）の東京歯科大学の1年後輩である．水川賛三郎は著者の祖父であるが，賛三郎が高山歯科医学院で学

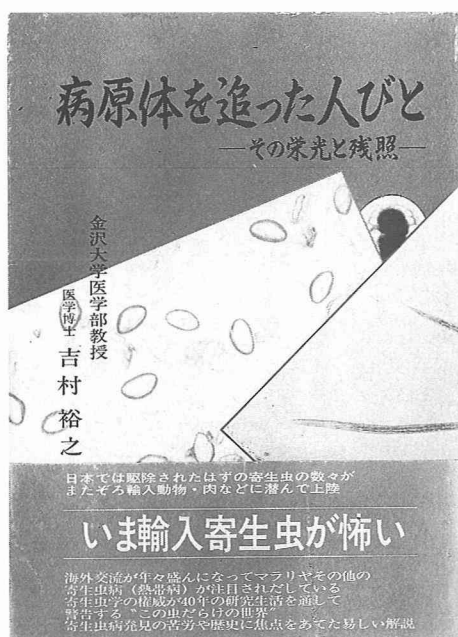


図180：吉村裕之：病原体を追った人びと。北国出版社，1988（カバーと帯）

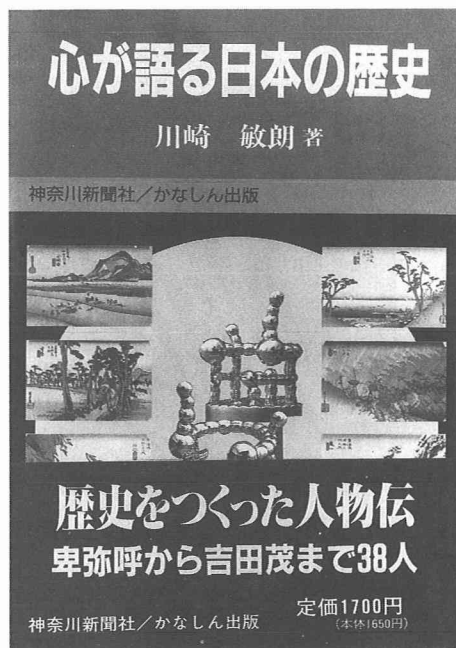


図182：川崎敏朗：心が語る日本の歴史。神奈川新聞社，1994（カバーと帯）



図181：高橋美幸：野口英世。吟遊社，1992（カバーと帯）

んでいた頃(明治29～30年)，野口が同学院で学僕として働いていたという。また大正4年に15年ぶりに帰国した野口が10月17日に東京歯科医学専門学校(現東京歯科大学)の卒業式に祝詞を述べたことや大正11年に血脇守之助校長が渡米した際に、野口の世話で5月26日に大統領ハーディングと会談したことなどが紹介されている。

228)野口英世記念会。同記念館(編)：フォトドキュメンタリー 人類のために 野口英世。279頁。野口英世記念会，東京；野口英世記念館，猪苗代。1996(図185)。野口生誕120年を記念して発行された写真集である。未公開だった数多くの貴重な写真が満載されていて楽しめる。156頁に「M・W・ミューラー博士(1902年6月13日のサイン)」という説明の付いた写真がある。これはまぎれもない齧蝕の“化学細菌説”の提唱者アメリカ人 W. D. ミラー(W. D. Miller)である。それで筆者らは説明の方が間違っていると考え、1996年6月8日の第42回松本歯科大学学会の口演の際に“W. D. ミラーと交友があったという(本書の)記事は新知見である。”と発表した(松本歯学，Vol. 22, No. 2, pp. 226～227, 1996)。しかし神奈川歯科

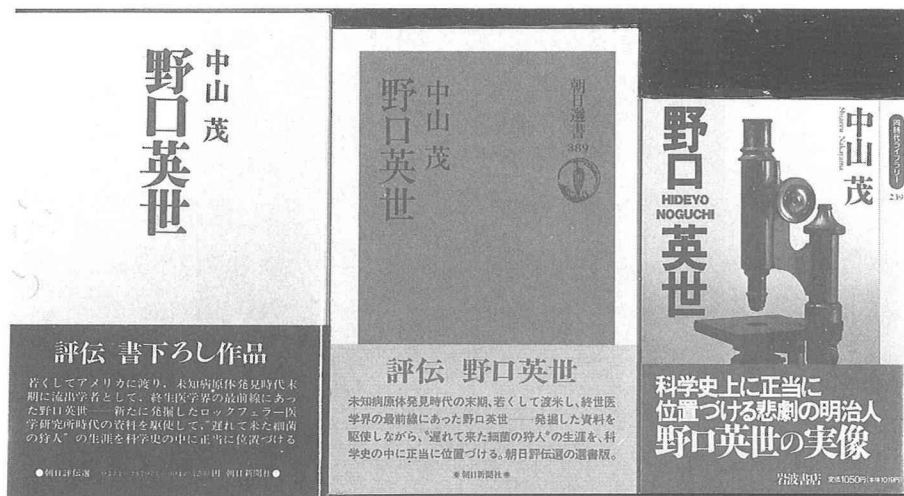


図183：中山 茂：野口英世。左と中は朝日新聞社，右は岩波書店。

左：朝日評伝選21，1978 中：朝日選書389，1989

右：同時代ライブラリー239，1995（いずれもカバーと帯）

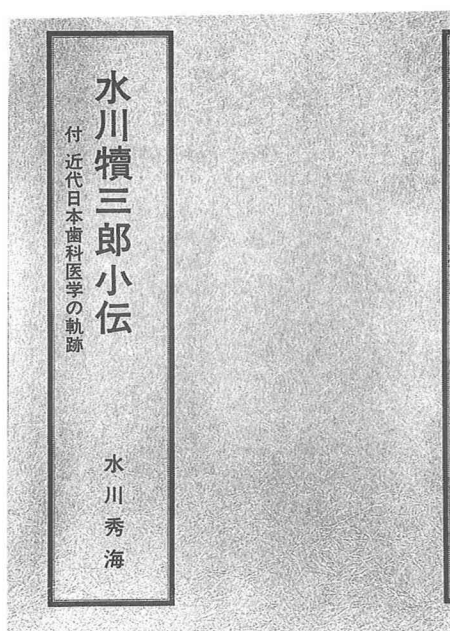


図184：水川秀海：水川積三郎小伝。自費出版，1996

大学の中村澄夫助教授のご教示によると，野口と W. D. ミラーとの交友はないはずなので，ドイツ人フリードリッヒ・フォン・ミュラー（Friedrich von Müller）の間違いではないかという。野口とミュラーがウィーンのドイツ自然科学及び医科大

会で会っていることは，奥村本にもエクスタイン本にも記されている通りである。確かに写真の説明にはミュラーとなっているが，M. W. という名前のイニシャルが合わない。そして写真は完全な人違いということになる。なお東京歯科大学関係の誤りを拾うと次の通りである。151頁下の東京歯科大学学長は東京歯科医学専門学校長，245頁の東京歯科専門学校は東京歯科医学専門学校が正しい。

229)野口英世記念館発行：まんが 野口英世。これは前書と同じく野口英世生誕120年を記念して発行されたもので，実は1994年と1996年に発行した2種の本をまとめてケースに入れたものである（図186）。前者は「村野守美：少年野口英世。176+16頁。」（図186中），後者は「菊地英一：世界の医学者 野口英世。192+8頁。」（図186右）である。なおケースの表の肖像画（図186左）はアクラのアメリカ人画学生が描いたものである。またケース裏には「おかえりなさい」という生誕120年のポスターがとり入れられている。

230)みやぞえ郁雄，関山英夫（監修）：伝染病に命をかけた医学の戦士 野口英世。159頁。小学館，東京。1996（図187）。小学館版 学習まんが人物館 全20巻の1つであるが番号は付いていない。

231)三浦義彰：医学者たちの150年 名門医家四代記。235頁。平凡社，東京。1996（図188）。三



図185：野口英世記念会（編）：野口英世、野口英世記念会，1996（カバーと帯）



図186：野口英世記念館発行の「まんが野口英世」（カバーと帯）

左：ケース 中：村野守美：少年野口英世，1994.

右：菊地英一：世界の医学者 野口英世，1996.

宅良斎，三宅秀，三浦謹之助，三浦義彰の四代である。謹之助のところ（117～118頁）に、彼と野口は同郷の福島県人ということで親交があったこと、彼が野口への叙勲申請に走り回ったこと、ロッ

クフェラー研究所を訪問した時、フレクスナー所長や野口を初めとする研究所員と一緒に撮った写真などがある。また151～152頁には、謹之助の紹介によって勝沼精蔵（名古屋大学長）が、研究所



図187：みやぞえ郁雄：野口英世。小学館，1996
(カバーと帯)



図188：三浦義彰：医学者たちの150年。平凡社，1996 (カバーと帯)

に野口を訪問したのが午前5時(野口の指示による)で、その時、野口は徹夜の実験が終ったところだったことが書かれてある。

232)山田風太郎：野口英世。人間臨終図鑑 I 15歳～55歳で死んだ人々，282～284頁。徳間書店，東京。1996(図189)。本書は第3報³⁾で紹介した171)(1986)の普及版で、内容は全く同じである。前者が上下の2巻のハードカバーでケース入りなのに、後者はやや小形でペーパーバックである。しかも第2巻(56歳～72歳で死んだ人々)，第3巻(73歳～100歳で死んだ人々)の3巻から成っている。

233)唐沢信安：済生学舎時代の野口英世。済生学舎と長谷川泰一野口英世や吉岡弥生の学んだ私立医学学校一。71～95頁。日本医事新報社，東京。1996(図190)。内容は発掘した新事実が多く注目に値する。例えば「野口の自筆の履歴書」，「渡部鼎の履歴」，「医術開業試験制度」，「教科書と前期試験問題」，「後期試験問題」などである。最後の方に、奥村本に「後期受験生80名中、僅かに4名合格した」とあるのは大きな間違いで、「野口と同時に後期114名合格す」と記されている。

234)Yamamoto, Atsuko: Doctor Hideyo Noguchi. 131頁。野口英世記念会。東京、猪苗代。1996(図191)。表紙や扉などどこにも明記されていないが、本書は写真や挿絵は違っているもののポプラ社から出版された「馬場正男：野口英世，1959」[第1報¹⁾の71)で紹介済]を山本厚子がスペイン語に翻訳したものである。その目的は野口と関係が深い南米ラテン諸国の子供たちに野口英世のことを知ってもらうためだという。

235)中山 茂：飛び交った自殺説—野口英世。科学朝日(編)：スキャンダル科学史，3～13頁。朝日新聞社，東京。1997(図192)。第3報³⁾の177)(1989)で紹介したものが、今度は「朝日選書570」になって装いも新たに再び出版された。帯には猿の実験中の野口英世と彼の肩に止った大きな蚊が描かれている。

あとがき

以上、野口英世の伝記類を初めとする関連書物36種38冊を記載した。これを第1報¹⁾から第3報³⁾までの199種234冊を合計すると235種271冊になる。われわれは第1報¹⁾の考察で、特に入手したい



図189：山田風太郎：人間臨終図巻Ⅰ。徳間書店，1996（カバーと帯）

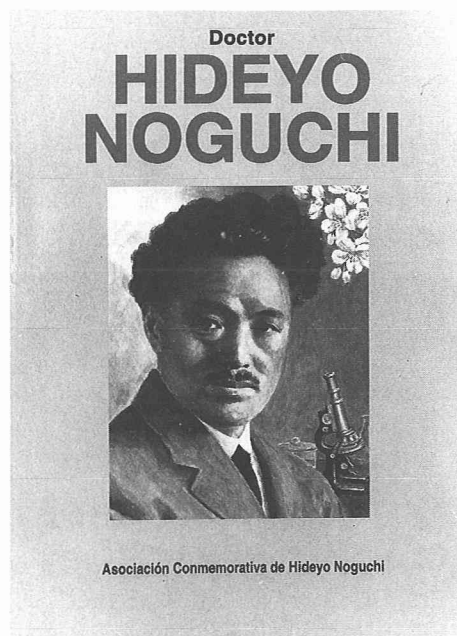


図191：Yamamoto, A.: Doctor Hideyo Noguchi. 野口英世記念会，1996

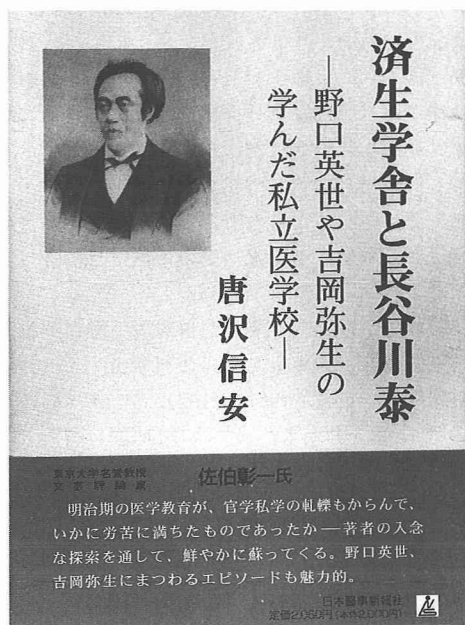


図190：唐沢信安：済生学舎と長谷川泰—野口英世や吉岡弥生の学んだ私立医学校—。日本医事新報社，1996（カバーと帯）



図192：科学朝日(編)：スキャンダル科学史。朝日新聞社，1997（カバーと帯）

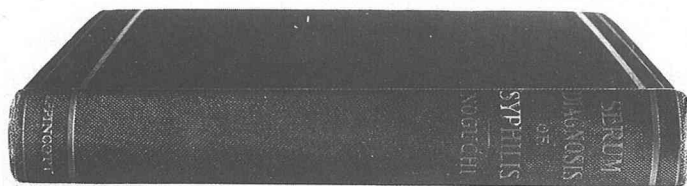


図193 : Noguchi : Serum Diagnosis of Syphilis. Lippincott, 1910

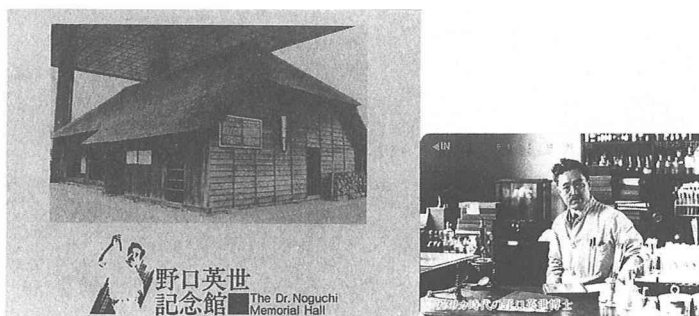


図194 : 野口英世のテレホンカード (左はケース).
野口英世記念館



図195 : 野口英世, 高山紀斎, 血脇守之助のテレホン
カード (左はケース). 東京歯科大学, 1990

ものとして1) 渡部毒楼(善助): 発見王野口英世, 1921, 2) 小林栄: 野口英世の思出, 1941, 3) 奥村鶴吉: 野口英世. 世界伝記全集40, 1956, 4) Plesset, I, R.: Noguchi and his Patrons, 1980の4種を挙げた. そしてその後, 第2報²⁾で4)のPlesset本, 第3報³⁾で2)の小林本の2版と3版を入手・紹介し, 今回(第4報)で3)の奥村本と2)の小林本の初版を入手することができた. これらは大収穫といえる. 残りの1) 渡部本は野口が生存中に出た唯一の伝記としてあまりにも有

名であるが, これの入手は現在となつては無理であろう. 今後は新刊書の絶えざる購入と, 偶然発見される古書の追究ということになる.

伝記ではないが今回入手できた野口英世の著書1冊とテレホンカード3種を付記しておきたい. 図193が, Serum Diagnosis of Syphilis and the Butric Acid Test for Syphilis. 173頁. J. B. Lippincott, Philadelphia & London. 1910(梅毒の血清診断学と梅毒のためのブチル酸検査)という著書である. 扉に To Dr. Simon Flexner と記



図196：野口，高山，血脇のテレホンカード（右）。東京歯科大学同窓会，1996

されている。なお本書と思われる書物の一部を，赤津誠内が訳した「ルチエン反応全」が1915年に南江堂から出版された。[本報の228]の75頁にその本の写真が出ている。]

次はテレホンカードである。第1報¹⁾の最後の方に野口英世記念館が発行した見学記念の2枚を紹介したが、その後、図194に示したテレホンカードが発行された。また1990年に発行された東京歯科大学創立100周年記念のテレホンカード2種のうちの1枚は創立者高山紀斎像の前で血脇守之助と撮った写真がとり入れられている(図195)。しかし小さすぎてよくわからないのは残念である。また東京歯科大学同窓会は創立100周年を迎えるにあたり、山田潔画伯に依頼して前記写真の模写絵を作成し、1995年10月21日に母校に贈呈した。この絵を写真と比較すると3人ともよく似ており最高の仕上がりである。ただし高山紀斎の胸像と野口、血脇とが写真ではやや離れすぎているためバランスを考慮して少し近づけるデホルメをされており、背景もぼかしてある。そしてこの絵と高山歯科医学院の校舎の2種のテレホンカードを作り、1か月後の記念式典に出席した人に贈った(図196)。

最後にいつもご協力戴いている神奈川県歯科大学生物化学教室 中村澄夫助教授、歯科医師 市川博保博士および松本歯科大学歯科補綴学第1講座 五十嵐順正教授に深く感謝する。

参考文献

- 1) 矢ヶ崎 康，加藤倉三，枝 重夫 (1987) 松本歯科大学所蔵の野口英世の伝記。松本歯学 13：1—34.
- 2) 矢ヶ崎 康，加藤倉三，枝 重夫 (1989) 松本歯科大学所蔵の伝記(補遺)。松本歯学 15：217—31.
- 3) 矢ヶ崎 康，加藤倉三，枝 重夫 (1994) 松本歯科大学所蔵の伝記(第3報)。松本歯学 20：80—99.
- 4) 枝 重夫 (1996) 野口英世の伝記についての備忘録。ながはま，(22)：47.

追記：脱稿後、アフリカのガーナ (Ghana) から野口英世生誕120年を記念して1997年5月に発行された野口の肖像切手3種を入手した。いずれも小型シートになっており、そのうちの1種は野口の肖像切手ほかに、ニューヨークのウッドローンにある墓地、三城瀉の生家、レーゴン (Legon) にある野口研究所、アクラ (Accra) にある野口庭園の4種があり計5種がセットになっている。